

David Notkin のこと

玉井哲雄

David Notkin が死んだ。4月22日のことである。今年の ICSE（ソフトウェア工学国際会議）は、5月18-26日にサン・フランシスコで開かれたが、Notkin はその実行委員長 (General Chair) だった。その開催を目前にして、これまでその一切を手配し取り仕切ってきた男が世を去ってしまったのである。1955年1月1日生まれということだから、享年58歳。まだまだ活躍してほしかったと、彼を知る誰しもが思った。

しかし、この ICSE の実行委員長を引き受けた時点で、すでにガンにかかっていることを当人は知っていたはずである。2010年12月1日にもらったメールには、10日前の検査で大腸ガンが見つかったこと、それもかなり進行したもので、次の日曜日に手術を受ける予定であることが書かれていた。このときすでに実行委員長を引き受けていたかもしれないが、それからでも辞退することはまだいくらでもできたはずだ。だからもしかしたら会議開催の時点では自分がいなくてもいいかもしれないということを覚悟の上で、実行委員長という激務を続けたことになる。そういうとちょっと無責任という謗りも聞こえてきかねないが、決してそんなことはない。万一の事態に備えて、今回の ICSE 運営の中心人物たちと周到的な打ち合わせをしており、彼の役割のどの部分は誰が分担する、ということを決めていたということである。

1 出合い

David Notkin は、カーネギーメロン大学 (CMU) で計算機科学の学位を1984年に取得し、ただちにワシントン大学に勤めて今日までそこでずっと研究・教育を続けた。その間、ACM (米国計算機学会) などを中心に幅広く活躍。多くの研究成果を挙げ、数多の優秀な弟子を育て、国際会議開催などの学会活動で類まれな組織力・指導力を発揮した。そのようなことの詳細は、ワシントン大学や ACM のウェブページから得られるので、それらを参照されたい。ここでは、個人的な思い出を書かせてもらうことにする。ただ、「個人的」といっても SEA の活動に関係することが多いので、必ずしもこの場にふさわしくないとは言えないだろうと、独善的に判断している。

David に最初に会ったのは、1990年の6月である。そのときはサバティカルで日本に来ていて、東工大の片山卓也さんのところにいた。David は僕のことを、彼の先生の Nico Habermann から聞いていたらしい。そこで、話をさらに遡らせて、Nico Habermann との交流について触れておくことにする。

Nico はオランダ人だが、1968年に CMU に加わってから、計算機科学・ソフトウェア工学の分野で大きな足跡を残した。とくに多くの優秀な研究者を育てたことで知られ、David がやはりたくさんの弟子を育成したのは、Nico の衣鉢を継いだものと言える。Nico は61歳で CMU の現役中に急逝したが、そんなところまで真似しなくてよいのに、David はさらに若い歳で死んでしまった。

慶応大学にいた土居範久さんは、1975年から76年にかけての1年間、在外研究で CMU の Nico のところに滞在し、Nico を始め多くの人脈をそこで作った。1977年に当時の通算省プロジェクト「プログラム生産技術」の一環としてかなり規模の大きな海外調査が生まれ、その中で、土居さんと今はどちらも亡くなってしまった廣瀬健さん (早稲田大学)、吉村鐵太郎さん (管理工学研究所) と僕との4人で米国とヨーロッパを回ったが、その際に土居さんのついでに CMU を訪れ、Nico に初めて会った。それがきっかけで、1984年6月のソフトウェア・シンポジウムの実行委員長を務めた際、Nico Habermann を基調講演者として招待した。このときのソフトウェア・シンポジウムはまだ SEA ができる前で、情報サービス産業協会 (JISA) が主催だった。岸田孝一さんが委員長をしていた JISA の技術委員会が、実質的な主催者である。

Nico は奥様の Martha とともに東京を訪れたので、うちの家内や土居さんの奥様も含め、家族ぐるみの交流ができた。さらに、同じ 1984 年秋に、当時自分が勤めていた三菱総合研究所から中期研修という形で米国に 3 か月滞在した際、ピッツバーグも訪れ、CMU の多くの研究者に引き合わせてもらったばかりか、Nico の家にも家内ともども招待された。このとき、David はすでにワシントン大学に着任していたはずで、CMU では会っていない。

こういう背景もあって、David とは最初から打ち解けて話げできた。彼が日本に滞在中のイベントとして記憶にあるのは、1991 年 1 月に行われた日米ワークショップである。これは協同システム開発株式会社 (JSD) がスポンサーで、日本は鳥居宏次さん、米国は Vic Basili が代表となってソフトウェア研究者・技術者を集めソフトウェアの信頼性などの問題について議論をするものであった。このときは、3 年続けて行われたワークショップの 3 回目で、芝パークホテルで行われた。グループに分かれての討論で、僕は David とともにソフトウェア・プロセスをテーマとするグループ 1 の座長をやり、そのレポートを二人で取りまとめた。グループのメンバーは多士済々で、岸田さん、Martin Thomas、野呂昌満さん、古宮誠一さんなどがいた。

2 1990 年代前半の ICSE などの付き合い

同じ、1991 年 4 月に、岸田さんの企画で中国の上海、南京を回る旅があつて誘いを受けた。David が夫人の Cathy とともに参加したほか、岸田、山崎利治、熊谷章、Jon Saylor、伊野誠、杉田義明、林香、佐藤圭という面々で、復旦大学、南京大学、南京のソフトウェア研究センターなどを訪れ、発表、討論をするとともに、江南の春を楽しんだ。たぶん南京でだったと思うが、街の切り紙による似顔絵作りの客に David がなつて、あの髭豊かな横顔を活写してもらっていたことが記憶にある。

この年の 5 月にテキサス州オースチンで開かれた ICSE に参加して、そこでも David に会っているが、これ以降ほとんど毎年、少なくとも ICSE では会うということが続くこととなった。ただ、1992 年のメルボルンでの ICSE では、往きの飛行機で片山さんと一緒だったが、乗り換えのシドニー空港で、シドニーから東京に向かう飛行機のゲートの列の中に David がいるのを片山さんが目ざとく見つけて、しばし話をした。つまり、ICSE の会場では会わずに、経由の空港で出会ったというわけである。彼からその前にメールが来ていて、ICSE の前の週にシドニーでワークショップに出た後、東京に行くが、会えないかというので、ちょうど行き違いだと返事をしたところだった。メールには 10 月に子供が生まれるということも書いてあった。それが後に生を受けて Emma と名づけられた彼の長女である。

1993 年の ICSE はボルチモアで開かれ、片山さんが二人いるプログラム委員長のうちの一入だった。このとき、1995 年の ICSE は David の地元のシアトルで開かれ、David と Ross Jeffrey がプログラム委員長になることが決まっていた。David に指名されて僕と Hausi Muller がその ICSE'95 のツール展示委員長をやることになっていたが、その最初の相談会を、David と Ross も含め 4 人でボルチモアで開いた。

しかし大変だったのは、ボルチモア ICSE の 1 か月後の 6 月にシアトルで開かれた、第 1 回ソフトウェア工学の基礎会議 (FSE) のプログラム委員会である。FSE はソフトウェア工学の理論面に焦点を当てた会議で今日まで続いているが、今では ACM/SIGSOFT (ソフトウェア工学研究会) にとって ICSE に次ぐ看板会議となっている。それを始めたのが David で、自ら初代のプログラム委員長を務めたが、そのときのプログラム委員会はたった 11 名で構成された。名前を挙げておくと、David を筆頭に、Harold Ossher、David Wile、John Gannon、Susan Gerhart、David Garlan、Lori Clark、Nancy Leaveson、Michel Young、Tom Repps と玉井である。玉井以外はすべて米国人で、ヨーロッパなどからは呼ばれていない。面白いのは、男性米国人 7 人のうち、3 人が David であることだ。朝 8 時半から夜の 9 時半まで集中して議論したが、さすがに疲れた。

この会議は 1 日間だったが、その前の日は David が家に呼んでくれて、そこで初めて Emma に会った。まだ生後 9 か月だったが、よく太っていて僕が抱いてもおとなしくしていた。夜は彼の家でパーティがあった。そのパーティのために、David が昼、パイク・マーケットというところに行き物に行くのに僕もついて

行った。David はそこでサケ 3 匹、カニ 6 匹、さくらんぼと野菜を買った。

FSE の会議そのものは、同じ 1993 年の 12 月にカリフォルニア州レドンドビーチで開催されたが、これにも参加した。日本からもかなりの参加者があった。David は会議期間を通じて八面六臂の活躍だった。

1994 年の 9 月には、ソフトウェア保守の会議 (ICSM) が Hausi Muller のいるカナダのヴィクトリアで開かれ、僕はそれに参加したが、シアトルが近いのでその前に寄って David の家に 2 泊させてもらった。David の家には来訪者用の記帳ノートがあって、日本人では片山、鳥居、岸田、などの名前がすでに載っていた。

この当時、阪大の井上克郎さんが在外研究でワシントン大学の David のところに滞在していた。また、JAIST の篠田陽一さんもいた。僕がシアトルに着いたのが 9 月 18 日だったが、9 月 20 日が Emma の 2 歳の誕生日ということで、少し早い誕生日会が開かれ、井上一家、篠田さん、米国人のお母さんと女の子、Cathy のお母さん、などが集まった。

翌朝、David, Emma と近くのコーヒーショップで朝食。スターバックスという店で、そのころシアトル流ということで人気が出始めたところということだったが、もちろんこちらはその名をまったく知らなかった。スターバックスが東京に出店したのは 2 年後の 1996 年で、しかもそれが北米以外の最初の店だったらしい。イギリスでの最初の出店は 1998 年という。

この日、Emma にはベビーシッターが来、やはり大学に行く Cathy と David と僕は 3 人で出かけたが、さすがに出かける際に Emma が泣いた。

大学に着いてから、David のオフィスでしばらく話し、Gail Murphy という彼の PhD の学生の話聞いた。Gail は今でこそ ICSE 社会の指導的な研究者として著名だが、このときはまだ学生だったのである。昼は井上さんと David と 3 人で、Prime Time というビアホール・レストランに行った。午後は現在の研究の話などを互いにした後、学内を歩いた。よく晴れてキャンパスが美しく、レニエ (Rainier) 山が見事に見える。David のオフィスに戻り、二人で歩いて家に帰ったが、歩いて 15 分ぐらいの距離で、気持ちのよい散歩だった。Cathy はヨガのクラスに出かけ、Emma と David と僕の 3 人は近くの簡単なレストランで食事した。歩いて David の友人、Jay、を訪ねたが、まだ帰っていなかった。大きな月が出ていた。

翌 20 日、Emma の本当の誕生日の朝も、David, Emma とスターバックスに行った。Frank という彼の友達に会った。前の日は、ここで男の子を連れた夫婦と話した。David が社交的なこともあるが、地域の付き合いがうまくできてるようだったと思った。

1995 年のシアトルでの ICSE は、4 月下旬に行われた。Hausi とやったツール展示も無事終わった。

3 David の日本びいき

少し先を急ぐと、1998 年には鳥居さんを実行委員長、二木厚吉さんと Richard Kemmerer をプログラム委員長として、京都で ICSE が開催された。これには、もちろん David も参加した。ちょうど、片山さんを研究代表とする科研の特定研究「発展機構を備えたソフトウェアの構成原理の研究」も進行中の時期で、その関係で「ソフトウェア発展原理ワークショップ (IWPSE)」が開かれ、片山さんが頼んだ Bob Balzer, David Notkin, Dewayne Perry などというところがこのワークショップの実行委員となっていた。僕も中谷多哉子さんとの研究結果をここで発表した。

僕は、この ICSE では博士シンポジウムという博士課程の学生を集めて研究の途中経過を発表させ、指導教員以外の外部の教授や研究者がアドバイスをするという催し (ICSE としては比較的新しいもので、確か 2 回目だったと思う) の委員長を務めた。その実行委員に David の一番弟子とでもいえるべき Bill Griswald に入ってもらったが、よく働いてくれた。

この 1998 年には David はまたサバティカルを取っていて、数か月イスラエルに滞在した後、ICSE に合わせて来日し、4 週間ほど日本にいた。それで、5 月に一家を家に呼んだ。Emma は 5 歳になっており、当時 9 歳だったうちの娘とはちょっと歳が離れていたが、一緒に遊んでいた。遊んでいる中でも、Emma の頭の良さはよく分かった。その下に、まだ 7 か月の Akiba という男の子が生まれていた。

2000年にはまず北京のIFIPの世界大会で会った。開催初日に、政府の要人が来るので”Attire formal”という注意書きが回っていた。要人というのが誰なのかはわからない。また、中国でフォーマルな服装というのがどんなものを指すのかも分からなかったが、中国の人に聞いたらシャツを着ていればよいという程度のことだと言っていた。8月21日のことで、8月の北京は暑い。

僕は会場からちょっと離れたホテルに泊まっていたので、朝、タクシーで会場に向かったが、途中で交通の流れが完全に止まって、「要人」による挨拶の開始に間に合わなかった。この要人のために、道路が完全にブロックされたらしい。遅れて会場に入ると演説している人がいるが、どうも江沢民のように見える。最初は原稿を見ながら中国語で硬い調子で話していたが、途中で原稿を置いて英語に切り替え、ざっくばらんな調子で若いころに米国で電子工学を勉強したことなどを話した。コーヒープレイクになってDavidに会ったら、珍しく紺の背広を着ている。Attire formalである。彼に聞いて、本当に江沢民であったことを確かめた。

同じ年の9月に、法政大学の市ヶ谷キャンパスで、ICECCS（複雑な計算機システムの工学国際会議）が開かれた。法政の劉少英さんが仕掛け人だが、Davidも招待講演者として来ていた。他に國井利泰さん、Mauro Pezze, John McDermidや玉井も招待講演を行った。驚いたことにその國井さんがEd Feigenbaumを連れてきた。2日目の9月13日に会場に行ったが、國井さんの講演の終わりかけの時間帯だったので、中には入らず、ホールでGeorge MasonのJeff Offuttという人と話したりしていた。そこへ、招待講演が終わって皆ぞろぞろ出てきた。片山さんなどにあいさつした後、Ed FeigenbaumとDavid Notkinと3人で話しこんだ。Feigenbaumは米国空軍が出す基礎研究予算の運営に関与していて、そのオフィスが東京にあり、そこに今、5週間滞在しているのだそうである。日本の研究状況をいろいろ聞かれた。

Feigenbaumには1985年にスタンフォードにAIの調査で行ったときに会っているが、もちろん彼の方ではそのことを覚えていない。この日は、Doug LenatのCYCプロジェクトの現状についてや、横井さんの日本語辞書プロジェクトを非常に高く評価していることなどを話していたのが印象に残る。とにかく、Davidを交えた3人で話に興が乗り、立ち話からソファに座りこんで話し続け、昼になったので、25階の食堂に行き、ピラフやカレーを食べながら話し続けた。

Davidは1997-2001年の間、ACMのSIGSOFTの会長(President)職を務めた。とくにその間、彼の日本びいきぶりが発揮された。たとえば、2001年のトロントでのICSEでは、岸田さんにそのICSEへの貢献などについて、ACMから功労賞が贈られたが、これはDavidの推薦によるものだったろう。また、彼は僕をACM SIGSOFTの次期の副会長(Vice Chair)の候補に推薦した。メンバーが主に米国人で、名の知られていない玉井が選挙で当選するわけではないが、その結果を見越したうえで、選挙後Davidの推薦により国際リエゾン担当の役員という無投票の役職に就いた。さらに、この年、鳥居さんが奈良先端科学技術大学院大学の学長に就任されたが、そのお祝いのあった5月に、Davidはわざわざ日本に駆けつけて来た。

4 9.11 とその後

2001年の9.11のときは、ウィーンにいた。ヨーロッパのソフトウェア工学会議ESECが数年前からFSEと1年おきに共同開催することになり、この年はヨーロッパで開かれる年だった。片山さんを中心にわれわれが始めたIWPSEも、この年から開催地を日本に限定せず、本格的な国際会議に発展したが、その海外初のイベントを、ESEC/FSEと併設としてウィーンで開いた。その実行委員長を僕は務めた。そしてこの後も続けてやろうということになり、Vaclav Rajlichと井上克郎さんに次のプログラム委員長を、青山幹雄さんに実行委員長をやってもらうことで、ICSE2002に提案することにした。そして、片山さん、Keith Bennett, David Notkin, Carlo Ghezzi, 玉井で運営委員会(Steering Committee)を作ることにした。

そういうことを決めた後で、あのニューヨークのニュースが飛び込んできた。会議に出ている米国人は皆帰れないのではないかという話になったが、9月13日から空港の閉鎖が徐々に解除されたようだった。

この時に限らないが、ホテルで取る朝食の時間が、Davidとよく同期する。ウィーンのホテルでも、9月13日にはDavidとKevin Sullivanと食べ、翌朝は、DavidとYvonne Coadyと取った。Yvonneはこの年

の10月から同僚の増原英彦君が行くブリティッシュコロンビア大学(UBC)の人である。その前の日は、彼女と Gregor Kiczales と話をした。

2002年のICSEは本来ブエノスアイレスで開かれる予定だったが、アルゼンチンの経済不況、政情不安のために急遽場所が変更されて、米国フロリダ州のオーランドで5月に開かれた。ICSEとの併設を予定していたIWPSEも、やはりオーランドで開催した。昼休みに、David Notkin, Carlo Ghezzi, 青山, 片山, 井上と次回のIWPSEについて相談し、2003年9月のヘルシンキのESEC/FSEに併設することにした。

SIGSOFTの会長職は2001年の途中で、DavidからAlex Wolfに引き継がれ、僕もICSEの際などにAlexによって招集される幹部会に出席したが、Davidも数年間は前会長として出席していた。会長はAlexからさらにDavidの弟子のBill Griswaldに引き継がれ、そのBillの任期中も僕は役を続けたが、その終わりごろにこちらから申し出て辞めさせてもらった。現在は香港工科大学のShing-Chi Cheungが僕の後を引き継いでいる。

Davidと最後に会ったのは昨年(2012年)11月で、米国ノースカロライナで開かれたFSE兼ICSE2013のプログラム委員会という場である。Davidは実行委員長としてプログラムの作成状況を見守るとともに、プログラム委員会の晩餐会の手配などの実行委員長としての仕事をこなした。この時も、ホテルの朝食に行く時間が同期して、2日続けて一緒に食事した。この年の8月に何度目かのガンの手術をしていて、東京で開かれた情報処理学会ソフトウェア工学研究会主催の「ソフトウェア工学シンポジウム」の基調講演を、直前にキャンセルしていたが、思ったより元気そうに見えた。こちらから病気のことについてはあえて触れず、FSEの第1回のシアトルでのPCのときのこと、泊めてもらった時の朝、当時あまり知られていないスターバックスに連れて行ってもらったこと、などの昔話をしたら、よく覚えているねと感心していた。

SEAの皆さんには退屈かもしれない個人的な交流の歴史を長々と書いたが、このようなつながりのあちこちにSEAの活動が結びついていることをご理解いただき、ご勘弁いただければ幸いである。